口頭発表「教室内動物飼育のよさと問題点
－モルモット飼育10年を経て－

鷲見辰美

１　教室内動物飼育の10年

学校での動物飼育は，主に屋外の飼育小屋で行われる学校がほとんどである．私の教室では小動物飼育を行うようになってほぼ１０年になる．小動物としては，ウサギ，チャボ，モルモットの飼育を行ってきた．持ち上がりのクラスもあり，この10年で４クラスを受け持ってきて，それぞれ違うパターンで飼育を行ってきた．その活動を通して，教室内飼育のよさと問題点が明確になってきたので，まとめてみたいと思う．

(1) １クラス目

最初は，１年生のクラスで子ウサギを飼い始めた．飼育小屋で飼育するつもりでもらってきたが，生まれたばかりだったので，しばらく教室で育てることにした．それが，そのまま３年間教室で飼育することになってしまった．我がクラスのウサギという意識が強くなり，クラスの誰もが飼育小屋に移そうと言わないまま３年間が過ぎてしまったのである．授業中に，ウサギが子どもたちの机の間をぴょんぴょんと跳んでいて楽しい教室であった．その子たちが今はもう中学３年生である．たまに遊びに来ては，あいさつのように，「ペッキー元気？」と言ってくる．ペッキーというのは，教室で飼っていた２羽のうちの１羽である．今でも，そのクラスにいた子の一人が家で世話をしてくれている．このクラスでは，ウズラも飼った．時々産む卵をうれしそうに持ち帰る子どもたちの姿が今でも残っている．

ミミと一緒にお別れ記念撮影

低学年では，時として２羽のウサギの世話をもてあますことがあった．毎日のそうじ，休日の世話で苦労することもあったが，子どもたちの心にはその体験が深く残ったようである．

クラスが別々になり，２羽のウサギは，家庭で引き取れる子が世話をすることになった．しかし，１羽のウサギはまもなく死を迎えることになってしまった．それが６月の出来事であったが，その１年後，元のクラスの子たちが花を用意して集まったのである．呼びに来た子の後についていくと，元のクラスの子がみんな校庭のすみに作ったお墓の前に集まっている姿を見て，１羽のウサギがこの子達の心に残したものの大きさを感じたのである．

(2) ２クラス目

５年生で新しく受け持ったクラスでは，２匹のモルモットを飼育した．この時は，本当に好きな子と全く無関心な子にきっぱり分かれていた．獣医をめざしたいという子は，ペレットだけではなく雑草が好きなモルのために雨の日でも外に採りに行ってくれた．卒業するとき，担任が次のクラスへと引き継いだ．

獣医師さんから，子どもが何でも無条件に受け入れる時期があるかもしれないというお話を聞いたことがある．確かに低学年からの飼育と高学年になってからの飼育では，そこに大きな差があったように思う．

(3) ３クラス目

引き継がれたモルモットと新たなモルモ

ットを加えて，新しい１年生のクラスで飼ったのが３クラス目である．これまで抱いたことがない子がほとんどであり，そうじをするにも一苦労の状態になる．獣医師さんにモルモットについて説明してもらって，ずいぶんいろいろなことが分かっても，すぐに世話がスムーズにできるいうわけにはいかない．そこで，２年生からモルモットの抱き方を教えてもらった．

そんな子どもたちも３年生の終わりにはすっかり慣れて，低学年に抱き方や世話の仕方を教えることができるまでになっていた．

そして，クラスが別々になる３年生の終わりには，ココたちをどうするか話し合った．ぜひという１家庭と，グループで世話をしてくれる家庭に引き取られることになった．

ココと私の心臓音を比べる

(4) ４クラス目

このクラスでは，１匹のモルモットを飼うことにした．１匹しかいないことは，休みに世話をする回数がぐっと減る．週末や長期休みに家で世話をするとき，愛情がぐっと深まるよさを感じてきた．それでも１匹にしたのは，１つしかない命をみんなで大切にする意義を感じて欲しいと願ってのことである．

このクラスは，今もこの１匹の飼育を継続中であり，子どもたちもクロと名付けかわいがっている．

やはり，もっと増やして欲しいと要望する子がいると思えば，１匹のモルモットの世話を忘れてしまうこともある．

１匹だけなので毎日抱かれていてストレスがたまってしまう心配をしていた．しかし，子どもたちなりにそれを理解していて，そっとしてあげる時間を子どもたちで決めていたことには感心させられた．

新しい仲間ができて喜ぶ子どもたち

こうした10年間の教室内動物飼育で感じてきた，教室飼育のよさと問題点をまとめてみたい．

２　教室内飼育の問題

(1) ２－１　アレルギーの問題

動物アレルギーを持つ子が，クラスには数人いる．飼育を始める前に調査を行うと，様々なアレルギーをもつ子がいることがわかる．幸いなことに近寄るだけで症状がでるという子がいなかったので，大きな問題にはならなかった．週末に家へ持ち帰ることはできないが，水替えなどで当番の仕事を果たしていた．ただ，持ち帰る体験がない子は，義務としての世話を続けている感じになってしまう．

教室内飼育で問題になるのは，アレルギーだと気づいていなかった子，アレルギー反応がなかったが途中で出てくる子である．週末に家に持ち帰り，勉強するときも遊ぶときも，自分の手元で遊ばせたり，抱いたりしていた子が突然アレルギー反応を示したことがある．適度な接し方をするように指導する必要を感じた瞬間であった．触ったらすぐに手洗いをする指導も大切になる．子どもたちはモルモットを抱いた手で，そのまま目をこすることがある．モルモットを触っていた休み時間に，急に目がはれてしまうことが何回かあった．顔を洗い，しばらくするとはれもすぐにひいたが，抱いたり触ったりしたらすぐに手を洗う指導は大切で，習慣にする必要があると感じている．

ぜんそくで家で生き物を家で飼うことができない子が，学校で一番よく世話をしていたということもある．家で飼うことがで

きない環境にある子が増えているからこそ，学校で飼育する意味が高まっているとも言える．

(2) 2－2　クラス解体時の対応

クラスが別れるとき，みんなで世話をしてきたモルモットやウサギをどうしたらいいのか子どもたちと話し合うようにしてきた．家で引き取りたいけれど親に反対される子，他の子のモルモットになってしまうのは寂しいと感じる子，低学年の子でも家で飼うのは無理かなと漠然と感じている子等，様々な思いで話し合いが行われる．

しかし，毎回感じるのは進んで引き取ってもらえる家庭が少ないことである．家庭の事情があるのも確かだが，クラスのモルモットを死なせたらどうしようという思いも強く，それを避けたいという気持ちがあることも一つの壁になっている．死は，一つの命を強烈に感じる瞬間であり，教育的な意義は大きいが，やはりその瞬間を避けたい気持ちは強く働くのを感じている．

今は，ペットも一緒に泊まれる宿も増えてきたが，旅行ができないなど行動を制限されることにもつながる．モルモットにすれば，1家庭で育ててもらうのが一番幸せだと思うが，グループでの世話だと可能だという家庭も多い．数人のグループで飼うということになれば安心感が得られる家庭もある．

(3) 2－3　毎日の世話

低学年だとどうしてもそうじをしきれない．モルモットは，衣装ケースほどの高さがあれば脱走しないので衣装ケースで手軽に飼育できる．しかし，衣装ケースのすみには，糞や尿が残りやすく衛生的によくない．担任が定期的に水洗いしてきたが，これも結構大変な作業である．動物飼育をすることで，世話を忘れる子の指導，長期休日のスケジュール作り等，時間を取られることも多くなる．

命を感じる，責任感を育てる，相手を思いやる心を育てるといった動物飼育のよさ，モルモットのかわいさが，面倒な作業を上回るからこそできる活動かもしれないとふと思うときがある．

3　教室内飼育のよさ

(1) 3－1　モルモットを通した人とのつながり

1年生の最初にモルモットを全く触ることができない子がいた．このとき，2年生の子は無理に近づけようとしないで，その触れない子が抱くことができるように工夫してくれた．

・別の1年生の子に抱いてもらい，安心していいんだよということを伝える．
・タオルを用意してきて，直接触れなくてすむようにする．
・まずは，えさや水をあげることをやってみることで，そのかわいいしぐさを見て抵抗感をなくすようにする．

結局，この子はそのときに抱くことができなかった．それでも，1，2，3年生と，週末家に持ち帰るうちに愛着をもてることができるようになってきた．

工夫して教える2年生

3年生になり，今度は1年生にモルモットの抱き方を教える機会が生まれた．ぎごちない抱き方をする1年生に教える姿は，自信に満ちあふれている．

いきなりモルモットを抱くことは難しいのではないかと考えた子どもたちは，模型を用意したり，紙芝居を作ったりして分かりやすい説明を心がけていた．

こうした活動で，子どもたちは相手のことを考えることを自然に体験することになる．動物飼育を行う一番の効果である．

(2) 3－2　命を感じる

ある朝，一匹のモルモットがすごく弱っていることに子どもが気づいた．そのまま，獣医師さんにも診ていただいたが，その日の夜に死んでしまった．次の朝，心配しながら登校した子どもたちは，モルモットの死を知って大泣きしながら埋葬した．死は飼い始めに，ためらう一因になる．しかし，限りある命を実感する体験は，何にも代え難いことを保護者にも子どもにも理解してもらいたいと考えている．

それでも，動物飼育をしようとする時，

保護者にとって死の瞬間は，最も大きな壁になる．獣医師の方が，バックアップしていただける地域だと，その壁はぐんと低くなる．安心感が全く違うからである．

しかし，そうした環境にある学校ばかりではない．私は，いつもこんな話を子どもや保護者にしている．

「モルモットが死を迎えるとき，一番安心できる場所を選びます．それは，もっとも世話をしてくれる子の所です．あずかった時に死なせてしまったと考えるのではなく，モルモットがそこで死ぬことを選んでくれたと考えてほしいのです．」

保護者は自分のところであずかっているときに何かあって，そこのことで自分の子が責められるのではないかと心配になる．私の話が真実だとは言い切れないが，安心感を与えるには効果的だと感じている．実際，これまで一番世話をしてくれる子のところで死を迎えることが多かったことは事実である．

実際には，長期休みで順番に回っている時を除いて，何らかの異常に子どもたちがすぐに気づいて担任に知らせにくる．そうしたときには，週末になっても担任が世話をしたり，獣医師さんに診てもらったりすることで対応してきた．

(3) 3－3　責任感の育成

長期や週末の休みには順番に家に持ち帰る．このときに，モルモットに対する愛着感がぐっと高まる．体重測定したり，等身大の模型を作ったり，えさの好みを探したりして密着した数日間になる．協力的な家庭では，家族でモルモットが家に来ることを楽しみにしている雰囲気を作ってくれることもある．

愛着感をもった飼育を繰り返すうちに，自分たちの無責任な行動が，一つの命を失わせることにつながることを実感するようになる．それが責任感の育成につながってくる．

当然，様々な理由で家に持ち帰ることができない子もいる．その子たちも順番は回ってくるが，自分で他の友達にお願いするようにする．責任をもつためである．日常の世話がアレルギーでできない子も，自分なりにできることは何か考えて行動できるように指導していく．

4　最後に

「めんどくさい」という言葉をすぐに口にする子がいる．今，その時だけの楽しさを求める子がいる．それはそれで子どもらしさの表れでもあり，仕方がないことかもしれない．しかし，生き物飼育が少しでも子どもの心を成長させてくれることを願っている．短絡的行動や軽薄さを改善していくことができる要素が動物飼育にはたくさんある．特に，教室内飼育ではよりその効果が大きいのではないだろうか．

最初に動物飼育を行い，現在は卒業してしまった子が，ウサギの命日に花束をもって小学校へ来てくれた．１羽のウサギが子どもたちの心に残していったものは，とても大きいものだったと感じている．

（筑波大学附属小学校教諭）